

Ⅲ 全ての子どもたちの成長を促すために

～考えてみましょう～

- ・「授業における生徒指導」と聞いて、どのような指導・支援が思い浮かびますか？
- ・なぜ授業づくりと生徒指導の一体化が大切だと考えますか？

授業に内在化した生徒指導が重要です。授業は、児童生徒が自ら発達することを支える生徒指導の実践の場です。児童生徒自身が、自分のよさや個性を伸ばし、社会性を身に付けるように、教師は授業のなかに生徒指導の視点を意識して組み込んでいきます。

Ⅲ - 1 生徒指導の目的

生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達できるように、その過程を支える教育活動です。

【生徒指導の目的】

生徒指導は、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えることを目的とする。

生徒指導において「発達を支える」とは、以下の5つの発達を含む包括的なものを意味します。

- ① 児童生徒の自信・自己肯定感（心理面）
- ② 興味・関心・学習意欲（学習面）
- ③ 人間関係・集団適応（社会面）
- ④ 進路意識・将来展望（進路面）
- ⑤ 生活習慣（健康面）

そのため、生徒指導は、単に規律を守らせるだけではなく、児童生徒自らが、行動を内省し、改善できるように、自己指導能力^{※1}の獲得を目指していくことが重要です。

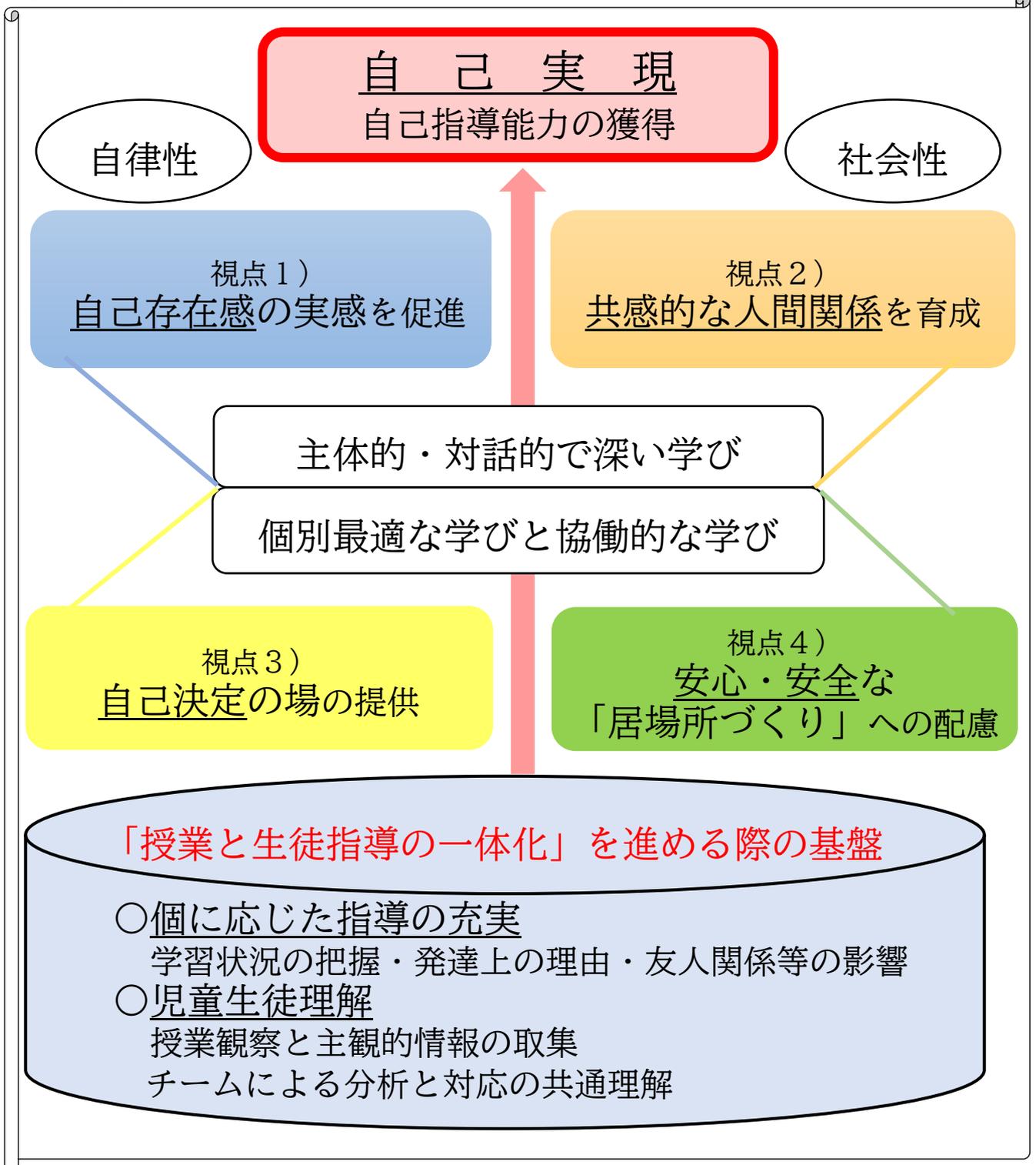
※1 自己指導能力

児童生徒が、深い自己理解に基づき、「何をしたいのか」「何をすべきか」、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定して、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力のことです。

Ⅲ - 2 授業づくりと生徒指導の一体化

授業場面では、学習指導と生徒指導を分けて考えるのではなく、相互に関連付けながら、両者の充実を図ります。「個別最適な学び」で重視する「自己決定の場」は、生徒指導の大切な要素です。また、「協働的な学び」に不可欠な「共感的な人間関係」も生徒指導の根幹となります。主体的・対話的で深い学びの充実は、自発的・主体的な成長を促す生徒指導につながります。

(1) 実践の4つの視点



視点1) 自己存在感の充実を促進

※p12とp13は p11の
図と対応させた順番で記載して
います。

○「どの子どもにもわかる授業」

「どの子どもにとっても面白い授業」の実践

自分も一人の人間として大切にされている実感をもたせる

- 1 存在感を育む環境づくり
 - ・承認や称賛、励ましを積極的に行う。
- 2 個別に存在感を育む場面作り
 - ・計画的な机間指導・支援を行い、一人一人の良いところを具体的に評価する。
- 3 仲間と存在感を感じ合うことができる場づくり
 - ・協力して活動できるように、ペアやグループ活動等を取り入れる。

個別最適な学びの実践

Aプラン

単元前半…一斉授業で基礎を押さえる。

単元後半…前半での学びを生かして自由に進める。

★自分のペースで取り組む個別化は、他者との比較による焦りや不安感を軽減→教室にいる安心感と課題に対する達成感へつながる。

Bプラン

単元前半…自分が取り組みたい課題を見つける。

単元後半…自分の課題を追求する。

★自分の強みを生かしながら学習することを通して、自分の得意なことを生かしたという自己有用感につながる。

視点3) 自己決定の場の提供

○子どもの学びを促進する授業の実践

自分の力で考えて、決めて、頑張ることができたという実感をもたせる

- 1 自己決定のための情報提供・環境整備
 - ・考える視点や方法、調べ方などについて情報を与える。
- 2 自己決定に向けた活動場面づくり
 - ・気づいたことや考えたことを書かせるなど、発言前に調べたり考えたりする時間を確保する。
 - ・友達と自由に考えをやりとりする時間、活動を設定する。
 - ・ペアやグループ、学級の中で、自分の考えを発表する場を設定する。

視点2) 共感的な人間関係の育成

○子ども同士が互いに関心を抱き合う授業の実践

互いに認め合い・励まし合い・支え合える学習集団づくりを行う

1 教師の共感する姿勢づくり

・子どもの発言・発表に、うなずきや相槌で反応する。 ・発言を板書する。

2 仲間との共感関係を育む場づくり

・相互評価など、互いのよさを認め合う活動を取り入れる。

3 共感的関係を確認し安心できる雰囲気づくり

・友達の発表に対して、発表者の方を向いて聴かせる、反応しながら聴くようにするな

協働的な学びの実践

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、子ども同士、あるいは他者との協働を通して、互いを尊重しながら、必要な資質・能力を育成する。

また、集団の中で個が埋没することのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かし、異なる考えであっても組み合わせるとよりよい考えが生み出されることを実感できる場面を設定する。

・AさんとBさんの意見は似ているね。 ・Cさんの意見に付け足すと……

・考えをつなげるとこんなことができそうだ。

視点4) 安心・安全な「居場所づくり」

○個性が尊重され、安全・安心して学習できる授業の実践

全ての子どもが安心して過ごせる、心の安定を支える学級づくりを行う

1 ルールづくり

・間違ったり失敗したりしても笑わない ・冷やかさないことを事前に約束しておく。

2 人・学級への貢献を認める

・課題を抱える子どもに寄り添ったり、相談に乗ったりした姿を称賛する。

・学級（みんな）のために行う行為を、称賛する。

3 集団の合意形成練習

・合意形成を図る話し合い活動（短時間の話し合いもあり）を続ける。

4 場づくり

・友達と仲良くなるための活動を準備する。 ・行事で、子どもに任せる部分を設ける。

・人間関係を構築する仕組みを作る。 例) 係活動、学級イベント

・学校行事で子どもに任せる部分を設ける。

～生徒指導は教育活動全体を通して行われます～

■特別活動と生徒指導

- 特別活動は、集団活動を通して、「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」という生徒指導の目的に直接迫る学習活動と言える。
- 「いじめ」や「不登校」等の未然防止も視野に入れ、児童生徒が互いに尊重し、可能性やよさを発揮する等、よりよく成長し合えるような集団活動を展開するよう努める。

■道徳教育と生徒指導

- 道徳教育は生徒指導と「相互補完関係」にある。道徳教育で培われた道徳性を「生きる力」として日常の生活場面で具現化できるように支援することが生徒指導の働きである。また、生徒指導上の課題に児童生徒が主体的に対処できる力を育む基盤となるのが道徳教育で育まれた道徳性である。

■総合的な学習と生徒指導

- 探究のプロセス（①課題設定→②情報収集→③整理・分析→④まとめ・表現）に沿った学習活動が、児童・生徒の主体的な選択・決定を促す「自己指導能力」の育成につながる。
- 他者との交流や協働を通して、学習活動が発展していく中で、自分とは異なる見方・考え方があることに気付いていく。また、地域等の大人との交流を通しては、社会参画意識の醸成にもつながる。

参照：「生徒指導提要」文部科学省 2022

「令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）」文部科学省 2021

「これからの児童生徒の発達支持」 八並光俊・石隈利紀 ぎょうせい 2023

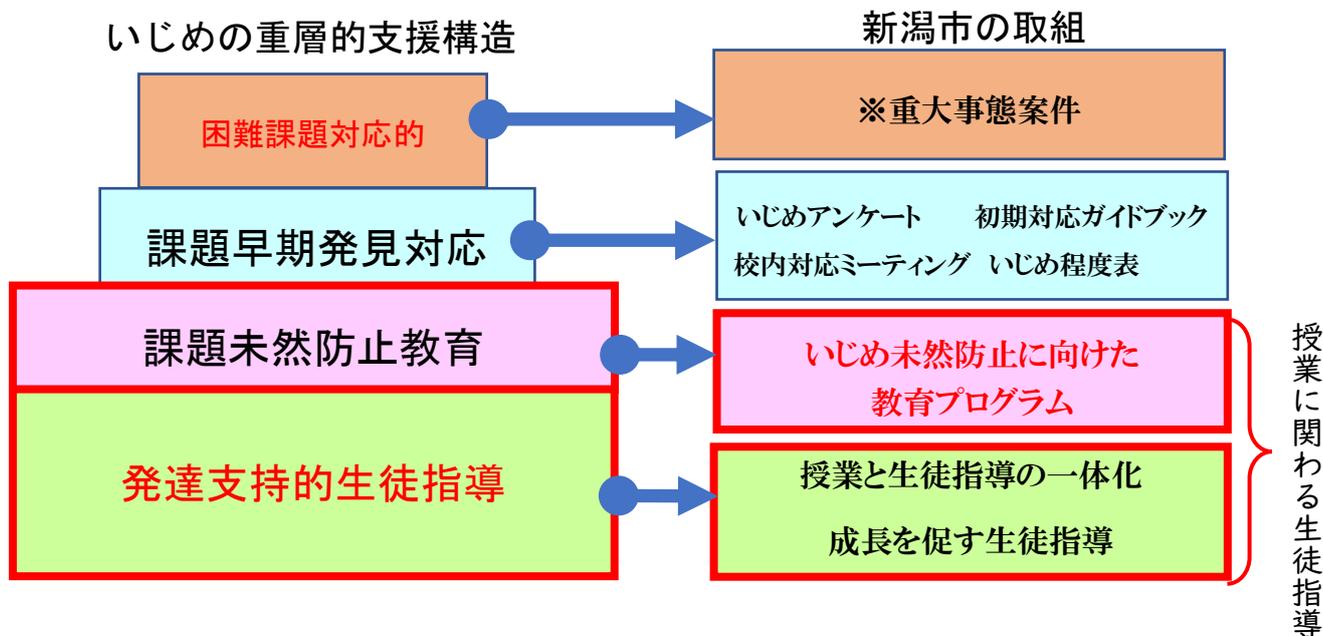
「NITS 校内研修シリーズ 生徒指導Ⅰ・Ⅱ」独立行政法人教職員支援機構 2023

「生徒指導リーフ2 絆づくりと居場所づくり」国立教育政策研究所 H24

「これからの学習指導—個別最適化・協同・動機づけ—」公益社団法人学校教育開発研究所 2023

「生徒指導提要を現場の目線で読む 第2章」東洋館出版社 2023

生徒指導は、児童生徒の課題への対応を対象や課題性の高低という観点から、構造化することができます。授業に関わる生徒指導は、「課題未然防止教育」と「発達支持的生徒指導」に当たります。先述した、自己指導能力^{※1}が獲得できるように授業づくりや環境づくりを進めていくことが大切です。



➤ 振り返ってみましょう

- ・授業の中で行う生徒指導として、今どんなこと行っていますか？
- ・「授業づくりと生徒指導の一体化」について新たに気付いたことはどんなことですか？
- ・視点1～4で、これから取り入れていきたいと思ったことはどんなことですか？

Ⅲ - 3 集団づくりの視点～支持的風土の醸成～

学校生活において多くの時間を過ごす学級は、学校生活における学習環境そのものであり、生活環境そのものでもあります。全ての児童生徒が安心して自分らしさを発揮し、自分の可能性を追求できる集団づくりを目指しましょう。



「支持的風土」づくりで大切なことは何ですか？



支持的風土とは

「認め合い、助け合い、期待をかけ合い、高め合う
温かい学級の風土」
のことを言います。

「傾聴・受容」「支援」「自律」は支持的風土に向かうための筋道でもあります。

自立に向けて、状況を見極めて適切に判断し、行動するなどの「自律」を体現していくには、仲間の「支援」が必要です。仲間を「支援」していくには、相手の考えや思いを「受容」していく必要があります。「受容」するためには、「傾聴」し、相手の考えや思いに共感することが欠かせません。

(支持的風土だより「テロワール」(学校支援課 2019)より)

傾聴・受容

- ◆相手を理解するために、積極的に関心をもって注意深く聴くこと。
- ◆言語メッセージだけでなく、非言語メッセージ（表情・しぐさ・声の調子等）から、言葉の背後にある感情を受け止めて共感することが大切。
- ◆傾聴を行うことで、引き出された相手の気持ちや考えを尊重し、相手が安心感を得ること。
- ◆聞き手がそのまま受け止める態度や姿勢を示すことが大切。

支援

- ◆相手の立場や状況、気持ちに応じた援助をし、相手に自信をもたせること（手を差し伸べる、時には見守る等、相手の身になって援助することに心掛けることが大切）。
- ◆相手が困っている時には、誰かれなく進んで手を差し伸べること。

自律

- ◆事実を基に的確に状況を捉え、自分の目標、集団に共有されている価値に照らして適切に判断し、行動できること。
また、自分の行動に責任をもつこと。
- ◆自分の行動を振り返り、今後どうすべきか考えること。

～ 支持的風土の理念 をもう少し詳しく～



傾聴・受容

～ 「聴くことに始まり聴くことに終わる」 ～

話を聴くことは人間関係づくりにおいても重要です。

「良い悪い」は一旦横に置いて、**まず相手（子ども）の話に耳を傾け**ましょう。自分の話をしっかり聴いてもらったり、聴いてくれたりする教師の姿を見た子どもは、徐々に聴き手として育っていきます。

「どの子どもも温かく丸ごと受入れ、平等に機会を与え、言動に寄り添い、支援し期待をかけ、達成感をもたせる」ことを大切にしましょう。

また、協働の場面など、相互に関わり合うことを大切にした学習を進めるには、子どもたちの聴き手としての傾聴態度がその学習の成功要因の一つとなります。

言語で伝わるメッセージは約7%、
非言語で伝わるメッセージが約93%と言われます。
両方のメッセージを聴きましょう。

「言語から伝わるメッセージを聴く」
「非言語を観察して聴く」

支援

「支持的風土づくり」のためには、教師が子どもを支援することは当然ですが、それだけでは十分ではありません。大切なのは、**子ども同士が支援的な関係**を結べるかどうかにあります。子ども同士が支援的な関係にある学級とは、次のような学級です。

子ども同士が支援的な関係にある学級の姿とは

- “一人残らず学級の全員がゴールする”ことを学級の**全員が**目標にしている学級

“一人残らず学級の全員がゴールする”とは、同時に全員がゴールすることではありません。自分さえできればよい、分かればよいというのではなく、**学級の仲間全員がゴールを目指すのだという心構えを大切に**することです。このことを全員が共通理解している学級は、どんな場合でも、その時々で困っている仲間のことを考え、行動することを大切にしている学級です。

- 自分は誰からもいつでも助けてもらえる、自分から遠慮なく誰に対しても常に助けを求められるという安心感がある学級

助けを求める側には、常に断られたらどうしようという不安があります。そんな心配のいらぬ「相手は決して断らない、必ず教えてくれる」という**信頼関係**で結ばれている学級です。

- どの子どもにも必ず出番がある学級

出番の少ない仲間にはみんなで出番を譲ったり、作ったりし合える学級です。失敗しても恥ずかしくない、むしろ、みんなが応援してくれるという確信があれば、どの子どもも**安心して挑戦**できます。

「支援」は、基本的には、相手が困ったり、分からなかった時に助けたり、教えたりすることですが、そこで大事なことは、あくまでも“**一緒に学ぶ**”という姿勢で「支援」すること、相手の“**一人立ち**”を目指した「支援」であることが重要です。

自律

「自律」は、社会人として大事な“状況を見極めて適切に判断し、自ら実践する”ことを目指しています。状況を見極めて適切に判断し、自ら実践する力の育成を見据えて、学級としての「自律」、個人としての「自律」を目指した支持的風土を醸成していくことが重要で

【自治的な学級集団とは】

集団生活に必要な規律やルールを自分たちで決め、それを進んで守り、自分たちの問題や課題は、自分たちの力で知恵を出し合いながら仲間と共に解決しようとしていく集団。

自律した学級集団の姿

規律やルールを他律的なペナルティを伴って守らせるのではなく、時間がかかってもその規律やルールの意味を理解し、自分たちで働き掛けながら進んで守っていこうとする学級。

指導の方向性

自分たちの活動目標を決め、その成果を自分たちで評価しながら前へ進んでいくPDCAサイクルを学級として機能させている学級。

教師の構え

- 規則やルールは、罰則を伴って守らせるものではなく、「互いに気持ちよく学習や活動をするためにみんなで守ろう」という姿勢を育てる。
- 不正には厳しい態度で臨み、学級では「正しいことを正しいこととして、遠慮なく言って実践しよう」という気持ちを育てる。
- 「自分の学級が大好きだ」「自分の学級が誇らしい」という思いを、誰もがもてることを目指す。

個人としての「自律」に必要なこと

自分の状況を正確に自己観察し、修正する力を付けること

この力を付けるには、①～⑥の過程を、子どもに意図的に経験させることがポイントです。授業や学級活動、学校行事等での振り返りや、キャリア・パスポートを有効に活用しましょう。

そして、子どもが自分で意識して行うことができるようにしていきましょう。

- ① 集団の目標を踏まえたうえで、自分の目標を立てる。
同時に評価項目も一緒に設定する。
- ② 目標を達成するための有効な手立てを考え、決める。
- ③ 達成のための実践、努力を主体的に行う。
他との連携が必要な時には自分から求める。
- ④ 活動の終了時（長いスパンの時には中間）や一定の期間が過ぎたら自己評価を行う。
- ⑤ 評価結果に基づき、振り返りを行う。
- ⑥ 振り返りを次の活動に生かし、振り返りを基に新たな活動目標を立てていく。

<振り返りの観点の例>

- 何が効果的だったか。それはなぜか。
- 何がうまくいかなかったか。それはなぜか。
- もし、また同じことをやるとしたら何を変えるか。
- この考え方は、どんな時に使えそうか。

「自律」の心を育てるためには、「自己を見つめ、振り返る」時間や機会が必要です。そのためには“書く”という行為がとても重要です。なぜなら、“書く”ということは“考える”ということであり、“書く”という行為を通して、自己との対話を深め、より深く自己を見つめることができるからです。“書く”ことは、「自律」の心を育てるために欠かせないものです。

子どもが書いたものに対し、教師が感想やアドバイスを送ることも、子どもの「自律」の心を磨いていくために極めて有効です。